

荒木・安井 (1992, s. v. ADJECTIVE PATTERN) は安井ほか (1976) をもとに改良を加えて、大きく名詞を主語にとる場合と仮主語の *it* を主語にとる場合とに分け、それぞれを形容詞が従える補文構造の種類によって分類している。特に仮主語の *it* をとる場合は、名詞主語をとる場合との関連を重視したものになっている。 *it is ... of you of you* を主語にすることができるものが (B4)、 *it is ... to do* の不定詞の目的語を文主語の位置に繰り上げることができるものが (B5)、 *it is ... that* の *that* 節の主語が文主語に繰り上げることができるものが (B6)、 *it is ... to do* の *to* 不定詞全体が文主語になることができるものが (B7)、対応する名詞主語の構文がないものが (B8) とされている。以下にその分類をあげる。

(A) *be* + Adj. + complement

(A1) *be* + Adj. + preposition + NP: She is *anxious* about your health.

(A2) *be* + Adj. + *to* VP: He is *willing* to give us his support.

(A3) *be* + Adj. (preposition) + clause: I am *afraid* I shall have to leave.
He is very *fussy* (about) how his meals are cooked.

(B) *it* + *be* + Adj. + complement

(B4) NP_i + *be* + Adj. + *to* VP
→ It is Adj. of NP_i *to* VP [NP_i = <+animate>]:
You are *silly* to make such a mistake.
→ It is *silly* of you to make such a mistake.

(B5) NP_i + *be* + Adj. + *to* VP → It is Adj. + *to* VP + NP_i:
John is *easy* to deceive. → It is *easy* to deceive John.

(B6) NP_i + *be* + Adj. + *to* VP → It is Adj. that NP_i + VP:
The weather is *likely* to be fine.
→ It is *likely* that the weather will be fine.

(B7) It is Adj. [(for NP +) *to* VP] → [(For NP +) *to* VP] is Adj. :
It is *inconvenient* (for me) to meet you

at 2:00.

→ (For me) To meet you at 2:00 is *inconvenient*.

(B8) It is Adj. that S: It is *true* that she never turned up.

Sinclair *et al.* (1998) は、形容詞のパターンを、(i)従える節 (*that*, *wh-*, *to* 不定詞、動名詞) による分類、(ii)従える前置詞 (e.g., *about*, *against*, *as*, *between*, *by*, *for*, etc.) による分類、(iii)*it* をとるパターンといったものに大別して、それぞれのパターンをとる形容詞を網羅的にあげている。これらの「パターン」は余りにも区別が細かく、形容詞の意味特徴とそれぞれの意味特徴をもった形容詞がとるパターンとの関係が明らかでない。網羅的である反面、非常に理解しにくい分類になっている。ここではこの分類をあげる余裕はない。

2 文法書などの記述の問題点

2.1 形容詞の意味とパターン

上に見てきたような分類の問題点はいくつかあるが、最も大きい問題は、パターンは示したけれども、ひとつひとつの形容詞がどのパターンをとるかということとの関連が明らかでないということである。形容詞のリストはそれぞれにあげられているが、そのリストは不完全であることはやむをえないとしても、そのリストにない語はどこに入るかという問題が残る。リストというのはそれなりに参考にはなるが、それ以上のものではない。その意味で、どういう性質の形容詞がどのパターンをとるかという観点からの見直しが重要である。どういう性質の形容詞がどのパターンをとるかという場合の「どういう性質」というのは、意味的性質に他ならない。

英語を母語とする人たちは、形容詞のパターンという認識は顕著ではなく、ましてや個々の形容詞についてパターンを記憶しているということもありえない。形容詞の意味に応じて、自動的に統語形式を選んでいるとしか考えられない。

結局、ネイティブの直観は、意味が決まれば統語形式が決まると考えざるを得ない。ネイティブが直観的に選択する、形容詞の叙述的用法の統語的なパターンを抽出すること自体はそれほど難しい